

手をにぎる

四十年も、病とともにあった母。

風吹く中の小さな炎のように生きてきた。

生命のやわらかさ、あたたかさを愛しむかのように
幼い孫の手を、何度も何度も握ってきた。

今はその母の手を、すこし大きくなった娘が握る。

「おばあちゃん、おばあちゃん。」と手を握る。

そのとき、母の瞳の奥にぽつと、命の炎が灯る。

その炎に母の頬がほんのりと照らされる。

ながく、その手を握れなくなった今、

母の炎が消えようとしている。

もう一度、その痩せた手を握ることができるのでし
ょうか。
どうかもう一度だけ、その手をそつと握らせてくだ
さい。

最期に母が、ぬくもりに包まれ、微笑みながら旅立
てますように。